

<論文>

仏典漢訳史における劉勰と文心雕龍

Liu Xie and *Wenxin Diaolong* in the history of translating the Buddhist scriptures into Chinese

北村彰秀

Abstract

When we review the history of translating the Buddhist scriptures into Chinese, we find that there was a long history of controversy between meaning-based translation and literary translation. When tracing the whole history of Chinese translation discourse, we cannot ignore the role of Liu Xie (劉勰) and his work *Wenxin Diaolong* or *The Literary Heart and the Carving of the Dragon* (文心雕龍). Liu Xie had remarkable influence on the composition of the book *Records on Publishing Buddhist Scriptures* (出三蔵記集). Moreover, he explained why writing in literary language is necessary and explained how to write in literary language in his book.

Wenxin Diaolong had further influence on the history of translation of the Buddhist scriptures. Around 600 A.D. Yangcong (彦琮) wrote a book on translation theory and insisted on what is called *Eight prerequisites and ten guiding principles*. We see considerable similarities between what he wrote and *Wenxin Diaolong*.

1. はじめに

翻訳とレトリックとは深い関係がある。レトリックとは、とりあえず話し言葉あるいは書き言葉を芸術的なものにするテクニックであると定義できようが、この定義からも、原文の解釈、また、訳文の推敲にあたって、レトリックの持つ意義の重要性が理解されよう。仏典のチベット語訳、モンゴル語訳にあたった翻訳者たちはカビヤダルシャというインドのレトリックの書に親しんでいた。中国においては、レトリックの古典として文心雕龍(ぶんしんちょうりゅう)が第一にあげられるが、これと仏典漢訳の歴史、とくに仏典漢訳の翻訳論との間には何らかの関係があるのではないかと思われる。そこでその関係を探ってみたい。

また、文心雕龍の著者である劉勰(りゅうきやう)は、仏典漢訳の最も重要な史料である出三蔵記集の編者である僧祐のもとで育てられたという、奇遇ともいふべき歴史的事実、嘘のような話があるのであるが、そのようなことから、文心雕龍と仏典漢訳史との関係は、ぜひとも確認しておくべきことであると思う。

2. 文心雕龍について

文心雕龍は紀元 500 年ごろ、劉勰によって書かれたものであり、扱っているテーマは文章の書き方である。現代流に言えば、文章読本と言ってよいであろう。文芸評論と言われることが多いが、文芸評論を展開しているのも、あるべき文章の書き方を追求するためにほかならない。全 50 章からなり、そのうちの 10 章においてレトリックが扱われている。最近の日本ではあまり読まれていないようであるが、非常に評価の高い作品である。

3. 文心雕龍と出三蔵記集との関係

出三蔵記集の編者である僧祐のもとで育てられた劉勰は、僧祐の指導のもとに仏典の目録作りの仕事を行い、その結果が出三蔵記集に収められていることは既によく知られている。また、出三蔵記集と文心雕龍の文章の類似は既に中国人学者によって指摘されている旨を興膳(1988)が述べており、氏はその類似点をさらに考究している。

4. 文質論争と文心雕龍

仏典漢訳の歴史において、仏典をどのように訳すべきかということをめぐる、文質論争とよばれる論争が展開された。これについては北村(2008, 2010, 2012b)に既に述べたとおりであるが、ここで改めて簡単に述べておきたい。

文質論争は出三蔵記集の経序の部分に記録が残っているが、文と質の対立をめぐるの論争である。文とはごく大まかに、「(文章の)美しさ、文体」のことであり、また、質とは「内容の深さ」と言い換えることができよう。それによれば、まず支謙は質(内容)を忠実に訳していくことを主張したが、道安は、五失本三不易とよばれる原則を打ち出し、翻訳は「文」を備えているべきこと、すなわち文学的であるべきことを主張した。ここにおいて論争はとりあえず終結したと思われる。

この論争の続きを、わたしは文心雕龍に見てみたいと思う。

文心雕龍の読者、研究者が、この作品を仏典翻訳と関係付けようと、あるいはそれとは別個のものとして扱おうと、それは各人の自由であろう。しかし、仏教界で 100 年続いた文質論争のあと、この作品が書かれたこと、著者の劉勰自身が出三蔵記集の編纂にかかわっており、その出三蔵記集が文質論争の歴史を記録していること、文心雕龍という書名自体が「文・質の両面に注意を向けよう」とのメッセージ性を持ったものであること(書名の説明はこの作品の最後の章にある)、この作品全体で文と質という問題を扱っていることを考えてみると、この作品を仏典翻訳と切り離して見るほうが、むしろ不自然といえるであろう。

文心雕龍は翻訳についてまったく触れておらず、また、仏教的性格の見られない文献であるが、質(よい内容)と文(文章の美しさ)の両方に注意を払うべきであると書かれており、また、両者を兼ね備えた文章を書くにはどうすればよいかということが論じられている。訳経僧たちもおそらくこの文献を読み、文学的翻訳を作り出すための助けとしたことと思われる。

劉勰は、文心雕龍の中の「情采 三十一」において、「文章を美しいものにする努力は必要

であるが、度を過ぎてはならず、その場に応じたふさわしい程度のものであるべきである」と説いた。この主張は道安の主張よりも、さらに進んだものであるということができよう。また、美文訳をめざす理由として、道安は「漢民族は美文を好むから」としか記していないが、文心雕龍においては、「原道 一」、「情采 三十一」などで詳しく論じられている。さらに、出三蔵記集においては、美文訳をつくるにはどうすればよいかという言及がほとんど見られないが、文心雕龍においては、31章から40章にわたる10の章において、美文を書くために助けとなるレトリックについて解説している。これらは翻訳の際にも助けになることはいままでもない。

文心雕龍の次に出現する文質についての言及は、出三蔵記集の胡漢訳経音義同異記中の、僧祐が書いたとされる翻訳論の中にある。(出三蔵記集の完成は文心雕龍よりもあとである。また、出三蔵記集の最初の部分は、この作品の完成間近に書かれたものと思われる。)その部分、主に北村(2008)によって(多少手を加えたが)以下に引用する。なお、括弧内の説明はわたしの加えたものである。

もともと奇(くす)しい真理には音声はなく、言語で表現されて初めて音声を伴ったものとなる。言語には本来、形がなく、文字となって初めて形あるものとなる。それゆえに文字により言語を把握でき、言語により真理を把握することができる。このような対応を忘れてはならない。それゆえに、文字というものは宇宙を包み込むほどのものなのである。文字は筆や墨によって書き表されるが、妙(たえ)なる真理さえも表現するほどのものである。昔、三人の者が文字を考え出した。……これらは異なる文字ではあるが、いずれも真理を伝えることができる。……こうして字によって意味を表し、涅槃をも表現できる。梵文での表現はみな、このようなものである。こうして梵文を理解することができる。明確な翻訳こそがよりどころとなるのであって、翻訳とは解釈であるということができる。お互いに両国の言葉を解釈するにあたって、誤りがあればもとの意味が伝わらない。……このように意味が保たれるのも失われるのも口頭翻訳者(仏典漢訳は口述筆記翻訳という方法によってなされたため、口頭翻訳者と筆記者がいた)によるのであり、訳文が原文の意味を伝え、美しいものになっているかは口頭翻訳の筆記者の能力による。サンスクリットに通じていても、漢の言葉ができない、あるいはその逆の場合も、誤解を生ずるばかりで、十分な意味伝達ができない。二つの言語に通じた後に訳経にあたるのが正しい。昔の翻訳者の中にはそのような者はいなかった。そのため、古い訳には意味のよくわからないところがある。これは原本が悪いのではなく、訳し方が悪いのである。……しかし過度の美文は媚(こび)を売ると同じであり、忠実に意味を訳そうとすると粗野な文章になる。いずれの場合も経典としては失格である。それだから、優れた翻訳者というのはほとんど現れないものなのだ。……経典のエッセンスは言語にあるのではなくて、仏の教えた内容である。それゆえに、梵文仏典も漢文仏典ももとはひとつであり、梵語と漢語で表現は違っても、意味するところは同一である。訳文の文体は時により異なり、そのため失われるものもあり、わかりにくい場合もあるが、経典の真理はいつも静かに光り輝いている。昔の訳語を集めてみたので、最近の訳語とあわせて記してみたい。……

出三蔵記集のこの部分および、その他のかなりの部分においては劉勰の影響が強いとの指摘がすでに興膳(1988)によってなされているが、この翻訳論を見ると、仏法ではなく、真理という、仏教的ではない(おそらく)大きなテーマから書き起こし、漢字の起源を述べ、過去の歴史から学ぼうとし、漢字の間違った使い方の実例を指摘し、文、質ともに重要であることを説き、また、中国語がすぐれた言語であると主張している。まさにこれは文心雕龍そのままであるとの印象を受ける。(過度の美文をいましめているところも、文心雕龍と同じである。また、過度の質訳も好ましくないとされている。)以上、似たところのみをあげたのであるが、短い文章の中でこれほどの類似箇所があるというのは、注目すべき事実である。おそらくこの部分はほとんど劉勰の筆になるものであろう。最後の部分に、「わたし(僧)祐は」という言及が出てくるため、その最後の部分だけ僧祐が書いたのではないかと思われる。わざわざ祐という名前を出しているということは、その前の部分が他の人物の筆になるものであるということを示しているのではないかとわたしは考える。もしそうでなければ、文章の途中で自分の名前を出すということは、極めて不自然である。さらにまた、この翻訳論の中には、「翻訳で、完全に原文の高さまで到達できる」との主張があり、また、「中国語は決してサンスクリットに劣る言語ではない」という主張があるが、これなどは、中華思想とも言うべきであり、仏教の思想とは異質のものであるとの印象を受ける。

劉勰が文心雕龍を書いた際、仏典翻訳の助けともなるようなものを書こうとしたのかどうかは、わからない。早急な結論は避けるべきであろう。しかし、出三蔵記集の編纂にかかわり、文と質という問題を深く考えさせられる中で、自らの著書においてもそのような問題を扱うことになり、出三蔵記集の経序の部分に述べられていないことがら、あるいは、不完全な形でしか述べられていないことを、詳しく述べることになり、その結果として、文心雕龍が出三蔵記集を補うかのように見えることは、否定できないであろう。また、文心雕龍ではあらゆるジャンルの文章に批評を加えているのであるが、漢訳仏典の批評はない。しかし、出三蔵記集の経序や僧伝の部分には、既に訳された経典の訳文や翻訳者についての批評が、そこそこに見られる。また、出三蔵記集は翻訳の問題を正面から扱っているが、文心雕龍では翻訳についてはまったく取り上げていない。また、出三蔵記集には、文質論争の歴史が、年代を追ってはいないが、とにかく記されている。2つの著が、互いに補い合うような様相を呈しているのは興味深い。

文質論争の歴史はある意味で老子、孔子の時代から始まるのであるが、その歴史の中において、文心雕龍という著作は無視できないものであるといえよう。

5. 八備十条と文心雕龍

出三蔵記集以後の文献について、仏典翻訳論と文心雕龍の関係をみると、例えば玄奘の翻訳論と文心雕龍の関係は、特に認められない。しかし、彦琮(げんそう)の八備十条と文心雕龍とは、なんらかの関係があるのではないかと認めざるをえないため、以下、それについて検討してみたい。

八備十条は大蔵経の中で、翻訳名義集、釈氏要覧および僧伝の中に出てくるが、翻訳名

義集の中のものをもっとも古く、本来の形に近いと思われるため、まず、その原文を引用し、その日本語訳を記す。訳文は大体北村(2008)によるが、多少改善したところがある。

彦琮法師云。夫預翻譯。有八備十條。一誠心受法。志在益人。二將踐勝場。先牢戒是。三文詮三藏。義貫五乘。四傍涉文史。工綴典詞。不過魯拙。五襟抱平恕。器量虛融。不好專執。六沈於道術。淡於名利。不欲高銜。七要識梵言。不墜彼學。八傳閱蒼雅。粗諳篆隸。不昧此文。十條者。一句韻。二問答。三名義。四經論。五歌頌。六呪功。七品題。八專業。九字部。十字聲。

彦琮法師は言う。そもそも翻訳にあたっては、八つの備えが必要であり、また十項目に注意を払う必要がある。八つの備えとは、第一に、真心から法を受け、人を益することを努めるべきである。第二に、よい立場を保とうとするなら、戒めを固く守れ。第三に、三藏(大蔵経)をよく理解し、五乗(五種の教法)に精通せよ。第四に、漢民族の古典に親しみ、経典の言葉をたくみに綴りだせ。つたない文章ではいけない。第五に、思いやりの心を持ち、心を広くせよ。何かにとらわれてはならない。第六に、道と学問に専念し、名誉と利益にこだわらぬ。高く評価されることを望んではならない。第七に、サンスクリットをしっかりと学べ。第八に、『蒼頡篇』や『爾雅』を学び、篆書・隸書の概略の知識を持て。漢の言葉にも精通せよ。十項目とは、第一に韻、第二に会話の部分、第三に語の意味、第四に教義、第五に韻文、第六に唱える言葉、第七に経典の題名、第八に自分の専門分野、第九に文字の形、第十に文字の発音である。

これを見ると、漢字のできたころのことに話が及んでいること、また、十条はすぐにわかるとおり、10項目あり、そして漢字の形と発音があげられていることから、文心雕龍との関係があるのではないかと思わざるをえない。(文心雕龍では修辭に10項目が挙げられているし、その中で漢字の形と発音が扱われている。)

そこでまず、八備の部分について、文心雕龍の似た箇所を並べて記してみる。文心雕龍の引用は目加田(1974)によるが、日本語訳はほかにもいくつかあるため、ページ数はあげず、かわりに章名を記しておくことにする。

第一に、真心から法を受け、人を益することを努めるべきである。

[文心雕龍]文采をのべ布(し)くのは、必ず軍機・国政に貢献するためであり、……国家の支えとなるべきだ。(程器 四十九)

第三に、三藏(大蔵経)をよく理解し、五乗(五種の教法)に精通せよ。

[文心]それぞれの場に応ずる文体に明らかに通じて、(風骨 二十八)

第四に、漢民族の古典に親しみ、経典の言葉をたくみに綴りだせ。つたない文章ではいけない。

[文心]まず博く読まねばならぬ。(知音 四十八)

ぜひとも博く読むことを務めねばならぬ。(事類 三十八)

実質は文采を必要とするのである。(情采 三十一)

言葉は文(かざり)があつて始めて遠く伝わるという。(同)

文采を發揮して外をかざるべきだ。(程器 四十九)

第五に、思いやりの心を持ち、心を広くせよ。何かにとらわれてはならない。

[文心]心を澄ませてなごやかにし、その氣をのびのびととのえ、もし煩わしくなつたときは一旦中止して、心志を阻害・渋滞させてはならぬ。……余裕ある中に文采をふるい、……(養氣 四十二)

心の閑逸というものが大切である。(物色 四十六)

第六に、道と学問に専念し、名誉と利益にこだわるな。高く評価されることを望んではならない。

[文心]よろしく素質を蓄えて内に満たし(程器 四十九)

世に容れられぬときは、独りその身を潔くして、文章を後世に伝え、(程器 四十九)

学問の乏しいものは叙べんとする事柄と理論にゆきなやみ(事類 三十八)

学識・検分は該博に、……(事類 三十八)

第八に、「蒼頡篇」や「爾雅」を学び、篆書・隸書の概略の知識を持て。漢の言葉にも精通せよ。

[文心]「蒼頡篇」や「爾雅篇」に精通し、(練字 三十九)

篆書と隸書は融合し、……字音・字画に精通してこそ、文墨の光采は躍動するであろう。(同)

これを見ると、無視できない類似があることがわかる。「漢文の作品をよく読め」と言っている彦琮が、文心雕龍を知らなかったということはあるまいであろう。文心雕龍の文章読本としての質の高さ、また、漢文の多くの文学作品やその他の作品に批評を加えていることから、彼はこの作品に親しんでいたはずである。

次に、十条の部分をも、文心雕龍の修辞の部分と対応させてみる。文心雕龍のその部分の概要を()内に簡単に記し、必要な場合にはなぜ十条と対応しているかも記す。

句韻

[文心] 情采 第三十一 (文章にはレトリックが必要である。)

問答(会話)

[文心] 鎔裁 第三十二 (文章には決まった書き方というものがある。無駄な言葉は除くべきである。)

名義(意味)

[文心] 声律 第三十三 (文章は声調の美を備えていなければならない。)

対応の根拠 訳文を美しいものにする際でも、もとの意味は保存されるべきである。

経論

[文心] 章句 第三十四 (四字句、六字句を使って文章を整えよ。)

歌頌

[文心] 麗辞 第三十五 (対句を用いよ。)

呪功

[文心] 比興 第三十六 (比喩を用いよ。)

品題(経典の題名)

[文心] 夸飾 第三十七 (適度の誇張表現を取り入れよ。)

対応の根拠 「品題」という語には、「評価」という意味もあるため。ただし、このような対応は多少無理があるようにも思われる。

專業(専門)

[文心] 事類 第三十八 (引用は適度に、間違いのないように行え。)

字部

[文心] 練字 第三十九 (視覚的にも美しくなるよう、文字の使い方を考えよ。)

字声

[文心] 隱秀 第四十 (すぐれた表現を用い、余韻のある作品を作れ。)

これをみると、無視できない対応関係があるのではないかと思われる。もちろん、完全に対応しなければならない理由があるわけではない。順序が変わってもよいし、また、項目数が変わってもよく、さらには、項目の内容に変更があってもよいはずである。しかし、順序も含めて、かなりよく対応していることは、我々の注意を引かずにはおかない。(順序を変えた対応も検討してみたが、このままの順序の対応がいちばんうまくいくようである。)

なお、十条の部分は単なる名詞の羅列にすぎないため、極めてわかりにくいものである。例えば、漢字の形といっても、左右対称とか、画数の多い少ない等を問題にしているのか、あるいはまた、達筆であるかどうかということの問題にしているのか、わからない。また、いずれの場合であれ、それが翻訳とどういう関係にあるのかがわからない。詳しい説明は現在失われていて、われわれは推測するしかない。しかし、文心雕龍のレトリックを扱った10の章と対応させることによって、彦琮が何を言おうとしたのか、推測することが可能である。そこで、それを以下にまとめてみる。

翻訳にあたっては、訳文の美しさにも注意を払わなければならない。会話の部分については、言語によって異なった慣例があるため、それにしたがって訳すべきである。(例えば 是か非かを問う質問では、英語の場合は yes, no なしに答えることはほとんどないが、日本語の場合は、「はい」、「いいえ」といった言い方が含まれていなくともよい。) 訳文は読んで響きのよいようなものにすべきであるが、原文の意味を変えてはならない。経綸、歌頌、呪功といったジャンルの翻訳においては、それぞれのジャンルにふさわしい方法で翻訳すべきである。ジャンルが異なれば翻訳方法も異なる。誇張表現においては、訳文においては、どの程度の誇張にするか、よく考えるべきである。誇張表現を用いることによって、訳文は文学的になるが、過度の誇張は

禁物である。原文に、何らかの引用や言及がある場合には、もし引用、言及されているものがよくわからない場合には、その方面に詳しい者に聞いて、助言を得るべきである。あるいは、みずからよく調べるべきである。(例えば、原文において当時の政治や演劇等についての言及があった場合、そのような方面の知識がないと、何のこともさっぱりわからないということにもなりかねない。)そして、訳文において、どのような字形、発音の漢字を使用するかにも注意を払うべきである。例えば画数の多い漢字がたくさん並ぶのもよくないし、また、同じような発音の漢字が3つ、4つと連続して出てくることも好ましくない。

彦琮(あるいは彼の翻訳論の紹介者)は、文心雕龍の影響が強すぎることを恐れて、あるいはオリジナリティーが乏しいことを恐れて、この翻訳論について詳しく述べることを避けたのではないかとも思われる。文心雕龍は仏教的作品ではなく、「人類の歴史以来、孔子ほど偉大な人物はかつてない。」(序志 五十)との言及があるため、僧侶たちに敬遠されたのかもしれない。(あるいはまた、仏典漢訳終了後、翻訳論はもはや必要ないとみなされ、彦琮の書いた翻訳論である弁正論等が処分されたのかもしれない。)

しかし、出三蔵記集との関係を見ても、八備十条との関係を見ても、文心雕龍は仏典漢訳の歴史と少なからずかかわってきた作品であると推測される。

6. おわりに

文心雕龍と仏典翻訳の関係については、今までほとんど注目されてこなかったようである。例えば馬祖毅(2006)の仏典翻訳の部分、王鉄鈞(2006)を見ても、文心雕龍の名前は出てこない。

しかし出三蔵記集も、文心雕龍も有名な文献であるため、この2つの作品の微妙な関係について、また劉勰と僧祐の微妙な関係についても、研究が進められていくべきであると思う。

彦琮の八備十条は、例えば河野(2006: 19-20, 26-27)、Cheung(2006: 144)等に、研究の歴史が多少とも記されているが、必ずしも十分研究がなされてきたとは言いがたい。さらに研究が深められていくことを望むものである。

以上、仏典漢訳と文心雕龍の関係について見てきたが、途中からモンゴルで執筆したこともあって、参考文献の面で多少の不足がないとはいえないであろう(特に中国語で書かれたものと、文心雕龍に関するもの)。中国語の論文については、文軍(2007)によって調べたが、そこにはないもの、すなわち2006年以後の論文については、時間的な関係で調べることができなかった。ただ、より多くの文献を参照することにより、結論が大幅に変わることはないと思う。また、同じテーマを扱った文献は、互いに結論を補強し合うものであると思う。翻訳論、仏教、中国文学の3つにかかわるテーマを扱ったため、あるいは重要な文献の見落としがあるかもしれない。ご教示いただければ幸いである。

.....
【著者紹介】

北村彰秀(Kitamura, Akihide) モンゴル聖書宣教会所属。モンゴル側との協力のもとに聖書モンゴル語訳の働きにかかわる。また、東洋における翻訳の伝統の研究、聖書翻訳との比較を行い、あるべき翻訳のすがたを探る。連絡先 a_kitamura07@yahoo.co.jp

【参考文献】

Cheung, Martha P. Y. (Ed.) (2006). *An Anthology of Chinese Discourse on Translation vol. 1: From Earliest Times to the Buddhist Project*, Manchester: St. Jerome Publishing.

井波律子(1996)『中国的レトリックの伝統』講談社学術文庫

門脇広文(2005)『文心雕龍の研究』創文社東洋学叢書

河野訓(2006)『初期漢訳仏典の研究——竺法護を中心として』皇學館大学出版部

北村彰秀(2008)『続 東洋の翻訳論——学者基本典を中心として』個人出版

北村彰秀(2010)『東洋の翻訳論Ⅲ——蔵蒙対訳「学者基本典」を出発点として』個人出版

北村彰秀(2012a)『翻訳のジレンマ——翻訳について論じる前に確認しておきたいこと』[Online] <http://www.honyaku-tsushin.net/extra/2012.01kitamura1.pdf> (2013年1月1日現在)

北村彰秀(2012b)『文質論争について——ナイダ以後の動き、日本における論争も合わせて』[Online] <http://www.honyaku-tsushin.net/extra/2012.01kitamura2.pdf> (2013年1月1日現在)

北村彰秀(2012c)『東洋における翻訳教育の伝統から(3)——仏典翻訳時に用いられた辞書、文法書、手引書等』[Online] <http://www.honyaku-tsushin.net/extra/2012.01kitamura4.pdf> (2013年1月1日現在)

『国訳一切経 和漢撰述部 31 史伝部一 出三蔵記集 改訂三版』(2000)大東出版社

興膳宏(訳注)(1968)『陶淵明 文心雕龍』(世界古典文学全集 25)筑摩書房

興膳宏(1988)『「文心雕龍」と『出三蔵記集』—その秘められた交渉をめぐって—』『中国の文学理論』(pp.113-242) 筑摩書房

目加田誠(訳注)(1974)「文心雕龍」『中国古典文学大系 54 文学芸術論集』平凡社

水野弘元(2004)『経典はいかに伝わったか——成立と流伝の歴史』佼成出版社

中嶋隆蔵(編)(1997)『出三蔵記集 序巻訳注』平樂寺書店

横超慧日(1979)「中国仏教初期の翻訳論」横超『中国仏教の研究第一』法蔵館

横超慧日(1983)「仏教経典の漢訳に関する諸問題」『東洋学術研究』通巻 105 号(22 卷 2 号)東洋哲学研究所

丘山新(1983)「漢訳仏典の文体論と翻訳論」『東洋学術研究』通巻 105 号(22 卷 2 号)東洋哲学研究所

丘山新(1996)「漢訳仏典と漢字文化圏——翻訳文化論」シリーズ東アジア第五巻『東アジア社会と仏教文化』春秋社

SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース(n.d.)[Online] <http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/> (2013年1月1日現在)

戸田浩暁訳注(1974)「文心雕龍上」(『新釋漢文大系』64) 明治書院

戸田浩暁訳注(1978)「文心雕龍下」(『新釋漢文大系』65) 明治書院

馬祖毅等(2006)『中国翻訳通史 古代部分』湖北教育出版社

王鉄鈞(2006)『中国佛典翻訳史稿』中央編訳文庫

文軍(2007)『中国翻訳史研究百年回眸(1880-2005)』北京航空航天大学出版社